

---

# 千雨の夢

メル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

千雨の夢

### 【コード】

N0988BA

### 【作者名】

メル

### 【あらすじ】

果たして夢を見ているのか、今までの夢だったのか・・・  
千雨魔改造ものです

## 夢の始まり

「長谷川さん。 長谷川さん！」

この良く出来た夢は、一見なんてことはない、良く晴れた春の教室の一室から唐突に始まった。

「・・・んあ？」

名前を呼ばれて顔を上げれば、教壇の上から女の先生が教科書と教鞭を持ってこちらを見つめていた。

ジャージ姿で教鞭を持つその姿を見て、小学校かよ、と思わなくもないが、変人揃いのこの麻帆良だ。十分許容範囲どころか、ど真ん中ストライクだろう。

それに実に動きやすそうだ。おそらくもう少し反応が遅ければ私の机の元へ向かってきただろうことは容易に想像できた。

「長谷川さん！ 先生がいま何て言ったか聞いていましたか？」

いけない、ボーっとしすぎたか。周りを見なくてもクラスメイトの視線が突き刺さっているのが感じられた。やばい、赤面ものだ。

いや、この程度このクラスじゃどうってことないのはわかってるけど、私には私のアイデンティティってのがある。

急いで何か返答しないと、えーっと、そもそも今は何の授業だったか・・・？

机の上の教科書が開いているページは、つと・・・

「もう、やっぱり聞いてなかったのね。もう一度聞きます、”なのだん”は覚えてきましたか？」

「・・・は？」

開けっ放しの窓から入ってきた風が、机の上の教科書を数ページ戻らせる。

そこには ” はじめての九九 ” と書いてあった。

「・・・は？」

それは、一見とても甘く優しい夢。そう、夢を見ているのか、夢から覚めてるのかも分からなくなるくらい、甘い甘い蜜のような夢だった・・・。

千雨の夢 はじまります。

ってモノローグっぽいこと言ってる場合じゃねえ！ 七の段!？

七の段って九九のあれだよな!？

なんだ、とうとう小学2年生からやり直しになったのか!？ 1年生からじゃかわいそうだから1年オマケしてやるよってか!？ うれしくねーよ!!

バカレンジャーだけつつこんどけばいいじゃねーか!

いや、それよりとりあえず七の段だ、落ち着け、確かに七の段は九九の中では鬼門だ、私的には最大の難関だった。つつーか語呂合わせ的なあれで答えりゃいいのか?

しちいちがしちしちにじゅうし、って言っていけばいいのか!？

「長谷川さん、ほら、しちいちが・・・」

しってるわボケー！！ わざわざ隣から教えなくてもいいって！  
誰だ、綾瀬か！？

「高町さん、教えちゃダメですよ？ ちゃんと十分で覚えないと意味が無いんです。」

高町さん！？ 高町ってだれだよ！？ てか良く見たらガキしかいねー！？ さすがに龍宮は無理があったか！？ 鳴滝姉妹がその辺にまざってねーか！？

ってか私だって無理があるわ！！

いや、待て、七の段だ、落ち着け、とりあえず七の段だ。こういうときはあれだ、まず慌てず騒がず七の段で立ち上がって、しれっと七の段を答えて座っちまえばいいんだ。

よし、まず椅子を引いて、立ち上がって、七のって何だこの視界？  
妙に低くねーか？

まるで身長が30センチくらい縮まったみてーな、って・・・

身長が            本当に            縮んでやがる

やばい            どーなってるんだ            これ？

「は、長谷川さん！？」

私は、意識を手放した。

「うわあああああああ!？」

掛け布団を蹴り飛ばし、勢い良く起き上がる。心拍数は最高記録を絶賛更新中で、息は喉が裂けるのではと思うくらい荒く、全身汗でびっしょりと濡れて。

1分か、2分だろうか、兎に角起きたまま固まっていたが、すこし落ち着いたところで辺りを見回す。

まず目に入るのはいつも寝ている自室のベット。次にコスプレ衣装が入っているクローゼット。そしてデスクの上に置いてあるパソコン、カメラ、部屋の隅に固められた撮影機材。

そこは既に1年以上を過ごした寮の一室だった。

「良かった・・・! 夢落ちでホントに良かったあ・・・!!」

やっぱりあれか、最近流れてる学年最下位だと小学生からやり直して噂、あれのせいか!

いくら麻帆良でもそこまでしねーだろ、とは思っていたけど、心のどっかではあれを信じてたのか。で、夢に出たと。

くそ、ここにいるかぎり安眠もできねーのかよ・・・!

「ちっ・・・はあ。・・・シャワーあびよ」

・・・まあ、それもいまさらか。登校の準備しねーとな。

今日も最低の一日になりそうだ。

「あー、ねみい……。」

昼休み。ふつーに一人で飯を食って、休み時間はまだあと30分くらいある。

睡眠時間はいつもと同じくらいだけど、あの夢のせいか眠くて眠くて仕方ない。

「おや、いつにも増して眠そうですね、長谷川さん。」

「ん……綾瀬か。」

伸びをしたり目の周りを揉んだり、なんとか眠気を撃退しようとして格闘してたところ、隣の席の綾瀬が話しかけてきた。

こいつは2Aの中でもまだ話せるほうだ。とは言っても比較的、という程度ではないが。

「今日は夢見が最悪でな、ぜんぜん寝れた気がしねーんだ。」

まあでも友人の範囲に片足の先が入り込む程度には喋る仲でもある。ほかの連中が濃すぎるだけに、綾瀬も一歩引いた位置によくいるためだ。

「午後一番は新田先生の授業です。ある意味眠気が覚めるかもですが、何なら授業前に起こすので一眠りしてはどうですか?」

新田か……。新田の前で眠そうにしてたら朗読や感想なんかをわ

わざわざ当てて来そうだな。  
ここは綾瀬にあまえるか。

「あー、悪い。それなら寝させてもらうかな。」  
「ええ、眠気覚ましの飲料も用意しておくですよ。」  
「いや、それは・・・いい・・・」

こいつの飲み物は・・・変なの・・・ばっかりだから・・・な・・・

「おや。本当にすぐ寝たです。そんなに夢見が悪かったですか。」  
「ゆえー。炭酸コーヒーのトマト味しかなかったよー？」  
「いえ、あるいみお誂え向きです。どうですか、のどかも？」  
「わ、わたしはオレンジジュースでいいやー。」

「・・・ん？ 布団？」

・・・あれ、なんで私横になって寝てんだ？ 机で寝てたような。  
それにここは・・・保健室？

「あー、長谷川さん！ 起きたの？ 大丈夫？」  
「ん・・・えつと、高町さん？」



またこの夢か！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0988ba/>

---

千雨の夢

2012年1月2日06時46分発行